

## 交遊抄 | 下町ロケットと私 鮫島正洋

2018/12/14付 | 日本経済新聞 朝刊

出会いは「異業種交流会」という名の飲み会だった。クライアントから「作家と食事に行きませんか」と誘われ、東京・青山のこじやれた居酒屋で、男ばかり6～7人で集まった際に紹介されたのが、作家の池井戸潤さんだ。「物静かな方」というのが第一印象だった。

池井戸さんは当時既に「半沢直樹シリーズ」を出されていて、小説に詳しい人には知られた存在だったが、恥ずかしながら私は存じ上げなかった。だがなぜか意気投合し、その後何度も男ふたりで飲みに行くように。私が中小企業の知的財産を守ることの大切さを力説すると、面白がって聞いてくれる。「特許訴訟を今度、小説で取り上げようと思っているんだ」とまで言ってくれたので事務所を案内し、30分ほど訴訟手続きについてレクチャーしたこともある。

案内したことも忘れた数カ月後。「お世話になったので、鮫島さんのことを書いておきました」との付箋のついた、小説「下町ロケット」が送られてきた際は、本当に驚いた。東京・大田の町工場、佃製作所の顧問弁護士として大企業相手に特許訴訟を戦う神谷修一のモデルが私だというのだ。格好良く書いてくださっているが、たった一つだけ違う点がある。私は「負ける裁判はしない」とは、決して言わないことだ。（さめじま・まさひろ＝弁護士）